

日本漢方協会通信

2021年 10月

〓 宮城の桔梗 〓

桔梗は万葉集の山上憶良が詠んだ「秋の七草」の中でアサガホという古い呼び方で出てくるように、里山に咲く日本人には昔から馴染みの深い花であった。桔梗の字は、更に吉と読める事から、縁起の良い花ということで好まれ、美濃の土岐一族、太田道灌、柴田勝家、明智光秀、加藤清正など多くの武将が家紋として用いてきた。

桔梗は花を愛でるだけでなく、漢方薬原料や食物として使用されている。薬としては咳を止め、痰を切るといった鎮咳、去痰作用があり重要な薬用植物である。また日本ではあまり食してこなかったが、朝鮮半島では桔梗をトラジと言って、薬用成分のサポニンを水で晒して苦味を除き、キムチ漬などにして使用しており、実際、食べてみると歯当りがよくなかなか美味しい物である。

さて、この桔梗は一昔前迄、日本の各地で見られた花である。現在、絶滅危惧種に登録されている訳ではないが、見つけることは非常に困難である。

子供が通った仙台の小学校の校章に使われているので聞いてみると、この所在地辺りの山に多く咲いていたとの事。もっとも、団地の造成で地形も変化し、日当たりの良い傾斜面は後に造ったものであり、緑が多く繁っていても見ることはできない。自生の桔梗を見たことがあるかと、植物に詳しい人達に聞いてみても皆無である。

園芸種で販売されている身近な花なので、あえて探してみるような物で

はないのだろうか。生薬を扱う仕事に興味がつり、実際この目で自生の桔梗を見たいと思った。なぜこの植物が見られなくなってしまったのか、自分なりに納得したいと思い宮城県内の探索を始めた。闇雲に捜しても難しいが、ある情報から石巻沖合いの田代島に自生しているとのことで、調査に訪れた。周囲2km程度の島なので楽に見つけられると考えたが、それらしい物はなかった。地元の年寄に聞いても子供の頃見たことがあるが、最近は無いとのことである。この島は猫の島として有名で、テレビなどで取り上げられており、やたらに多い猫の顔を拝んで終わった。そのようなとき、ある植物学者から県南部にわずかながら残っているとの情報を得た。その一帯は田園風景が続く里山が連なったところで、一切地形に手を加えられていない所である。その一帯をくまなく探したところ、やっと里山の傾斜面に一輪の青い繊細な花が目に見え込んだ。さらに奥に進むと、そこにはまさに失われた世界と言うべき光景で、桔梗が20m位に亘って群生していた。その場所は人が入らない山の裏手になり、それでいて日当たりも良い場所であった。いままで人目に付かない為、温存されていたのだろう。

では、自然界の自生桔梗とはどのようなものだろうか。我々が目にする園芸種のもは、矮小化され50cm位の丈であるが、自生のもはススキなどの植物と競合し、日を浴び、花に昆虫を呼ぶ為背が高い。桔梗

は根から何本かの茎を出すのが、自生のものはより高く伸びようとする為か、一本立ちになるものが多いようである。現地で測定した一番高いもので、1 m 50 cmもあり、他も1 mを超えていた。

このような高さだと当然折れやすいと考えられるが、良くしたもので、周りの草が添え木の役目になり、花が天を仰ぐことが出来ている。ある意味共存しているということか。

いままでの調査から、同じキキョウ科であるが、ツリガネ人参（沙参）の生えているところには桔梗は生えていない。何か土壌の好みがあるのか更に調べてみたら面白いと思う。一方オミナエシの生えているところを好むのか、この場所も桔梗と一緒に咲いていた。ちなみにオミナエシも最近では見られない植物となってしまった。遠くからそれらしい黄色い花を見つけて近づくとセイタカアワダチ草でがっかりする。オミナエシは敗醬根という生薬名で消炎、排膿、鎮静作用があり、この乾燥した根は醤油の匂いがすることから名付けられている。

自生の桔梗は園芸種と比べ葉の形態はより細く、シャープな感じである。花の色は青より紫まで多様で瑞々しい。この植物は草原や山の斜面などの日当たりの良いところを好む。

また、調べてみるとこの植物は南南東の向きを好むようで、花もこの方向に顔を向けているものが多い。

この自生地にも、東日本大震災の津波が押し寄せた。桔梗の生えているさらに10 m位上まで海水に浸かった。海水の塩分によりかなりの植物が枯れたりしたが、桔梗の根が肥大し養分を蓄えている為か6割に発芽が確認出来た。このようなストレスに対しても、生き残る力を有していることに感心する。

津波の後、近くの田は塩害の為に放置され、草の生え放題になっていた。それに対処する為、強力な除草剤が散布され桔梗の生えていた場所一帯

も草のみならず、太さ5 cmの松の木までも枯れてしまった。かろうじて散布を免れた範囲2 m四方の桔梗が生き残っただけであった。

近年、この植物が全くと言っていいほど見られなくなってしまった原因は何であろうか。人による採取、宅地造成などの地形変更、大気汚染による酸性雨、里山の手入れ不足、除草剤の試用など、今回にみられるように自然に起こるストレス以外の人的影響によるものと言っていいだろう。

今回、自生の桔梗について述べたが、我々はどのような時代になろうとも、自然植物界から恩恵を受けるものがあることを認識し、保護していく必要があるのではないだろうか。最後になぜ野生植物が大切なのかという疑問について、昭和大学薬学部講師・磯田進先生が栽培物との比較で的確に述べているので紹介する。

「絶滅が心配な植物たち（植物小話より）：栽培されている株は人間の都合によって、長年に亘り淘汰されている。その為、遺伝的な多様性は失われ、栽培に適した株のみが残ってしまう。遺伝的な多様性が失われると、例えば病気によって一斉に枯れてしまう危険性が大きくなり、反対に絶滅が早まると指摘されている。」今回、自生の桔梗について述べたが、我々はどのような時代になろうとも、自然植物界から恩恵を受けるものがあることを認識し、保護していく必要があるのではないだろうか。

薬用植物栽培分科会
田口 哲之

【会報記事募集】

現在、こちらに掲載致します
記事を募集しております。
漢方に関するものでしたら
何でも結構です。
会員の皆様のご応募お待ちしております。

